

自然美との出会い Encounter with Natural beauty

かえらず 不帰の滝 (百選外)

令和元年7月22日 宮城県蔵王町遠刈田温泉

築瀬 知史

東日本高速道路株式会社／日本緑化工学会 会長 (xsmay8@gmail.com)

なぜ少数派の滝が好きなのか？

私は、登山も滝もド素人。

ブラックな時代を駆け抜けてきた私たちの世代にあっては、余暇は寝てみたいという人も多く、私もその一人だったかと思う。自身の観光と言えば、家族を連れてスキーに行く以外、テーマパークや水族館など、ありふれたお手軽ばかり、ハイキングなどアウトドア系とはほとんど無縁。

自身の三男は離島の隠岐島前高校に島留学した（させた？）のだが、五十路を迎える直前に初めて隠岐を訪れ、自然の素晴らしさに唸った。高校のある中ノ島は、「無いものは無い」というキャッチコピーが鮮烈で、島にはコンビニすらない。島前の他2島、西ノ島も知夫里島も、あるのは素晴らしい自然とその恵みを生かした産業のみだ。

平成27年10月、5回目の隠岐で訪れた隠岐道後、壇鏡(だんぎょう)の滝(日本の滝百選)。壇鏡神社のご神体でもある。凄さはないものの裏見で水に近づける素晴らしい所で、「滝好き」と回帰するきっかけとなった。

子供の頃、関東平野の舌状台地と低地境に残る斜面林を、探検ながら、上から下まで敷漕ぎをしたものだ。

5年生のこと、新設小学校の建設で使用する道路が造成され、大きな切土法面ができた。一面、コンクリートブロック張の人も立てないような急斜面。今に言うボルダリングのように、水抜き穴を掘みながら登った。

道なき道も滝壺を目指す今の滝行スタイルの原点と言えるかも知れない。

日本の滝百選を知ったのは、平成が終わる頃。私が知る百選は、小学4年生の夏の遠い記憶にある浄蓮、前述の壇鏡を含めても、僅か7箇所。冗談半分に「マニア」を名乗っていたが、少ない数に愕然とし、恥ずかしくもあった。その少なさが逆にやる気につながった。前々勤務地の仙台在住時、ネットでたまたま見つけた蔵王の不帰の滝を綴るHPの文字に震えた。突き動かされるように、滝百選巡りを決意した。すでに孫もいて、膝の外側半月板脱臼ロッキング癖という爆弾を抱えているが、脚が動くうちにに行きたいと強く思い、残り93滝は必須と決めた。

百選巡りの途中からは、半分趣味の誦経と、「飛沫を浴びるアンチエイジングの壺巡り」という最もらしい言い訳を加えた。

「これが、百選？」と、個人的には、首を傾げてしまう場所もあったが、それは30年近く前に、北は大雪山、東は知床、西南は西表島と政治的判断も加えて全国に散りばめて人が決めたこと。

だがしかし…、たかが百選、されど百選。

還暦の誕生日までの達成目標として、93滝は3年余り、半年を残して達成したのだが、いくつか心に残る滝を紹介したいと思う。

お読みいただけた方に何かのヒントになれば幸いです。

数回にわたり自然を楽しんだ記録を掲載いただけることで、老後のために趣味とした滝行について、当時の紀行を編集し直しながら記してみたい。滝名横の文字は、自身の日本の滝百選訪問順の「数字」か「百選外」かを記した。

読み進める前に時間が許せば、箱書きの滝行前段をお読みいただけると話が分かりやすいかもしれません。

既に出張や旅行の折、3つを加え計10箇所の百選を訪れていたが、「滝マニア」を自称する自身の実力がどれくらいのモノか見極める必要もあり、百選巡りを始める前の力試しとして、まずは、ここからと決めていた。

前回5月の雪解け時には、情報の覚え間違いから前衛二の滝(仮称)で虎杖(いたどり)の残骸の上を滑落し阻まれたが、7月の来仙に合わせて休みをとり、再度挑戦する機会を得た。

一般的観光客は駒草平駐車場から不帰を見る(写真1)。

標高約1200mの賽磧(さいのかわら)駐車場を出発(10:30)。濁川への下降地点までは、舗装された道を進む(写真2)。

5月には三途川の上部に幅100m程の雪渓が残っていた。雪山の知識のない私は、少しばかり東北の山を舐めていた。

前回(写真3)とは全く様相が異なり7月といっても肌寒く、霧の中。足元の植物以外は、彩度がない景色で、不帰も振子も見えない(写真4, 10:48)。

この日は蔵王の火山活動により、下降点から先は通行禁止となっており、硫黄の臭いがしたら諦めるしかない。



写真1 駒草平展望台から見た不帰の滝



写真 2 舗装道路を覆った三途川上部の雪渓



写真 6 前衛一の滝



写真 3 振子滝と振子沢



写真 7 ガレ場と大岩, 右奥に不帰

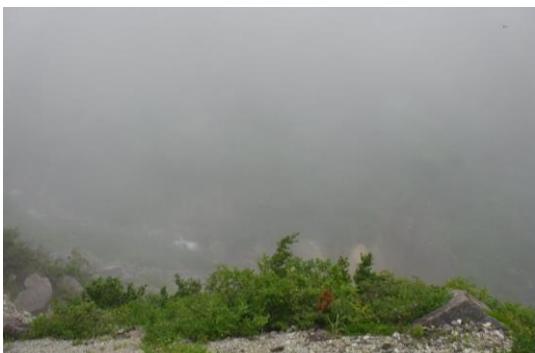


写真 4 僅かに濁川が見える下降地点



写真 5 心寒い鉄色の濁川

濁川まで標高にして 150m 程を一気に下る。私は、重い荷物を担いで…というのは、どうも性に合わない。絶景マニアではあるが、登山は進んでしようとは思わない。基本、「日帰り、軽装。可能な限り楽をして、絶景を独り占めできれば、なお良し！」って感じだろうか。

彩度のない景色は、全く面白みが無い。雪解け水が音を立てて流れていたジグザクの下り道は、私のような蛮人でさえ山野草をありがたく感じた。

濁川（写真 5, 10:56）。濁りは、酸化鉄の錆色。川底や周囲が総じてそう。淒みはあった。

ここから不帰までは、直線距離にして 1km 弱。川沿いを遡上していくので、沢登りも出てくる。だが、霧中の濁川に、こんな大岩がゴロゴロしていると、目的地があると知らなければ、先に進みたいとは思わない。前回、前衛一の滝を撮り忘れているので忘れずに収めるという気持ちで行く。

歩けども全く進んでいる感覚がないまま、落差 12m の前衛第一滝（写真 6, 11:10）。直登できそうな感じだが、前回同様、濡れた後の寒さを考えて、登らずに左岸側を巻く。このあたりからは踏み跡も見つけ辛く、適当な木の根や草を掴みながら高度をあげた。辺りは、雪に隠れていた落葉樹が顔を出している。

また、ここからは沢登り。

しばらくすると、右岸側に張り出した大きな岩と植生、迫力のあるガレ場の最奥に不帰が見えてくるはずだが(写真 7)，今日は全く見えず。面白味のない景色を進む。

水音が一際響いてきた。落差 10m の前衛二の滝が現れる(11:25)。前回は、右岸を右壁と思い込み無念の滑落をした所(写真 8)。

ガレ場や右岸側には、既に雪がなく巻けそうなことは分かっていたが、力試しのリベンジの目的もあり、あえて滝の左壁を登攀する。

2 分程壁を見分。他に手掛かりがなく、飛沫をざんざん浴びながら浅い壺の中からスタート。表面はてかてかしているが思いの外滑らない。上方に移動していくと左側に手掛けが増え、徐々に滝からずれ水浴びを避けることができた。

落れば危険だが、僅か 1cm の手掛けでも心強い。ビビる間も、休む間もなかったが、登り切るまで 7 分もかかった。下方を振り向くと、怖いくらいの壁(写真 9)。帰りは巻道を探そう。

少し休み、心を整えて立ち上がる。上流側を振り返ると、霞の中に不帰が(写真 10, 11:36)。

壺までは、もう目と鼻の先、音にならない歓喜の声が沸き上がる。

脚が勝手に動き出す。

早く早くと何かが急かす。

達成感は半端ない。

彩度のない世界。

音も飛沫も超一級。

幻想的な景色が一面に広がる。真昼の太陽が天頂僅かに暖かみのある色を見せている。



写真 9 前衛二の滝の滝口

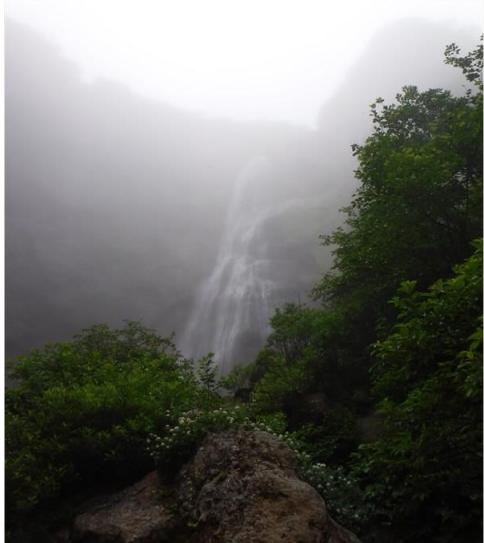


写真 10 前衛二の滝を越え臨んだ不帰

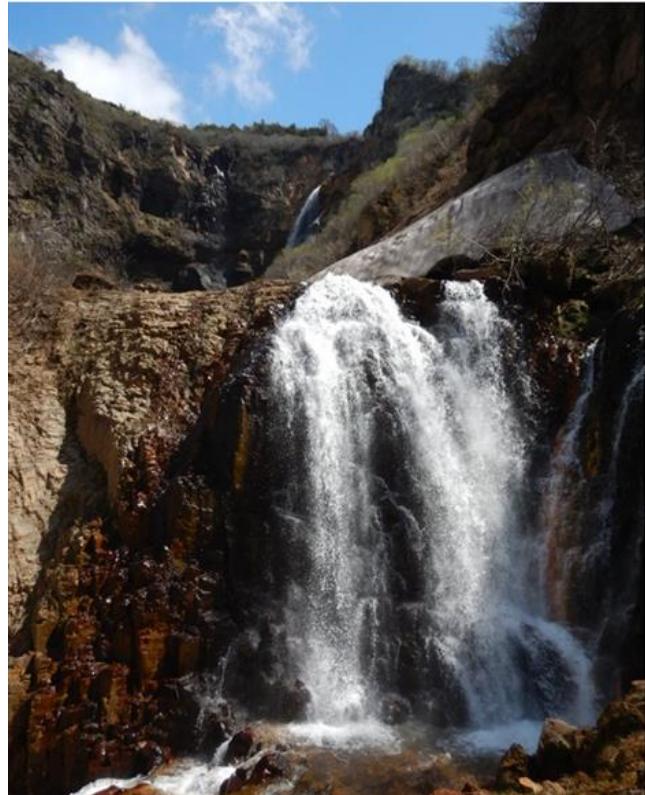


写真 8 前衛二の滝、上が不帰

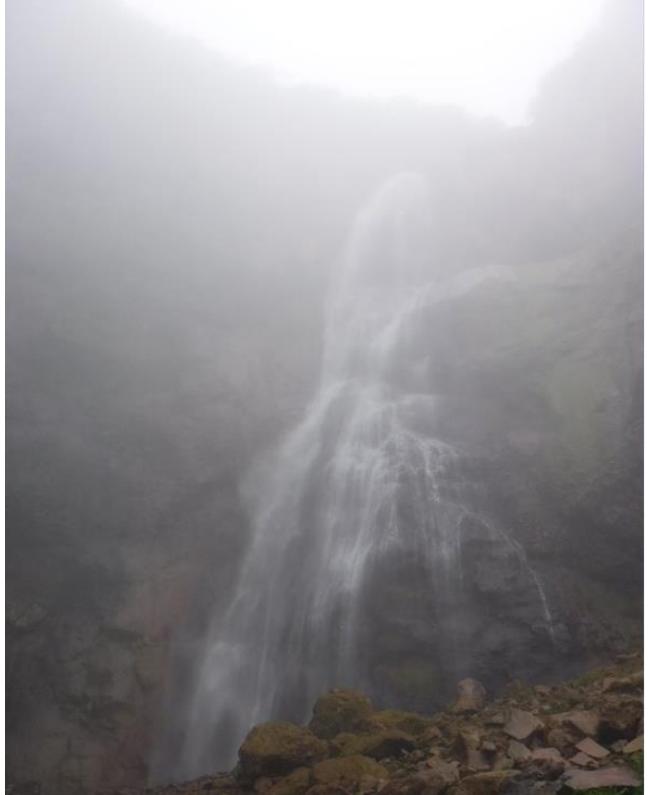


写真 11 不帰の滝全景



展望台から見える線的な美しい直滝ではなく（写真 1），ここから見えるのは、綺麗に裾が広がった部分（写真 11）。97mの下半分か、中空から見れば、箒のような形なのだろうか？

真横から見ていたのか？写真を振り返るとそんな気がする。壺は、想像とは違って優し気な感じがする。

大きな滝では水が吸い込まれて、滝壺にはほとんど水がないか、波がざわつき、水面が不規則に動く所が多いが、ここは同心円的に綺麗な波紋を拡げていて美しい（写真 12）。

上方を見上げると、細く分かれた水流が束になり凄まじい勢い。私の技術では、暖かみを感じる空の色を上手に捉えることはできなかった。（写真 13）

不帰の名の由来は、「藏王の難所で帰ってくることができない。」とも「余りに美しくて帰りたくない」とも言われている。「三途川」「賽磧」など周辺の地名を見ると、かつては前者とは思うが、この場所に立てた者は、感性的に後者となることだろう。

思考活動が停止したまま、かなりの飛沫を浴びて、肌寒くなった頃、我に返る。

滝から少し離れ、飛沫が然程気にならないところまで戻り、誦経。

正午丁度に不帰を後にする。

復路は、巻道を探しながら右岸側へ向かう。断崖まではガレ場の登り道。不帰を最も美しく見晴らせる所かも知れない（写真 14）。

ガレ場と崖の境目は比較的平坦で、ガレ場が見えなくなる密生したブッシュまで進む。

雪解け時の様相（写真 7）とは全く違い、枝葉が確り生え過ぎていて、ガレ場の斜面が見つからず、進むべき方向を迷う。ここからは、株の隙間を探し、沢地形の凹部まで進み、灌木の根元を掴みながら高度を下げる。しかし、行けども行けども河原には着かない。高く上がりすぎたか？

段々と斜面も急になってきて、凹部は水を集め、小沢となっていく。足を滑らせたりもしたが、両側の灌木をしっかりと掴めたおかげで怪我はなかった。

どれくらい時間が過ぎたのか、やっとのことでの河原。前回私を苦しめた虎杖が憎々しげに繁茂している。左を見ると、前衛一の滝（12:27）。あらら、前衛の2つの滝を通り過ぎている…。これでは下り続けているのに着かないはずだ。不安な行程では、時間が途轍もなく長く感じるが、往路 31 分に対し、復路の時間は 27 分。

登り返し地点（12:39）、下降地点（12:55）と順調に過ぎ、三途川あたりの視界は回復しかけていたが、樹々が鬱蒼として川はどうだろうか？

駐車場まで無事に到着（13:11）。この後は、不動の滝（藏王）で締めくくる。

幻想的な曇天も良いが、晴れた不帰のもと、2度も忘れた自撮り写真を確りと撮りたいと思うこの頃。

いつしか誰かのガイドで来る時だろうか。

<了>

動画に興味のある方は、こちらをどうぞ！

<https://www.instagram.com/xsmay8/>

写真 12 不帰の滝壺 同心円状の波紋が美しい



写真 13 不帰の滝壺からの空

